

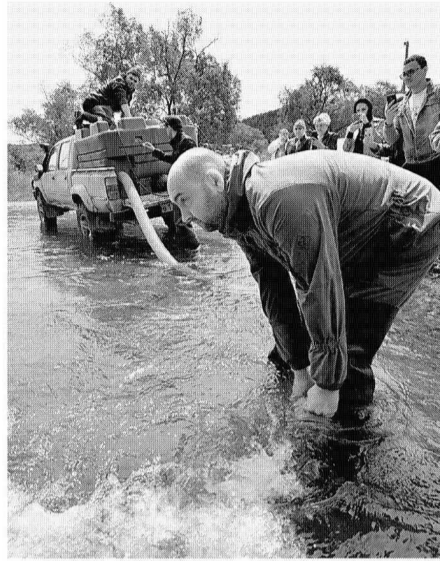
サハリン 進むイトウ保護

官民共同で稚魚放流／密漁の監視強化

【ユジノサハリンスク細川伸哉】日本で「幻の魚」とも呼ばれ、釣り人に人気がある大型の淡水魚イトウの限られた生息地サハリンで、稚魚の放流など保護活動が活発化している。サハリンは北海道に比べイトウが生息しやすい河川環境が残るが、密漁などによる減少が避けられない状況だからだ。関係者はイトウの保護活動で先行する道内とも連携したい」と望んでいる。



道内に比べ、数多く生息するサハリンのイトウ。アインスコエ湖



今月、トナイチャ湖に流れる河川で行われたイトウの稚魚放流

サハリン中部西岸にあるアインスコエ湖。戦前の日本時代に未知志湖と呼ばれた秘境湖は、現在も湖畔に近づける舗装道がない。近くに住むパク・ユンウンさん(64)のボートで湖に入り、ルアーを投げると、50〜70センチのイトウが何匹も釣れた。パクさんは「都市部から遠く、レジャー客がほとんど来ないので、昔から環境

調査や教育 道内との連携望む

の変化を感じない」と話す。釣ったイトウは放流が義務づけられている。イトウはロシアのレッドリストで絶滅の恐れが2番目に高い部類に位置付けられ、1997年、捕獲が一切禁止された。ロシア漁業庁によると、サハリン島では、217ある河川のうち6割に当たる129河川と20の湖にイトウが生息する。サハリンの淡水域はダムや護岸など改修の手がほとんど加えられておらず、自然の姿が残る。日本では猿払川や尻別川など道内の約10河川にしか生息しなくなったのに比べ、多くのイトウが残っているとみられる。ただ、イトウの保護に長年関わる漁業庁のセルゲイ・マキエフ研究員(64)によると、生息河川のうち約8割で絶滅が危ぶまれ、残る河川でも毎年1〜2割ずつ減少しているとの報告がある。主な原因は食用を目的とした密漁で、州都ユジノサハリンスクから近いトナイチャ湖などでは、密漁者が設置した網がしばしば発見される。こうした中、漁業庁や州政府、民間のふ化場は共同で2013年から、人工ふ化させた稚魚を放流する取

イトウ 日本国内最大の淡水魚で、体長1メートルを超す個体もいる。サケ科で繁殖できる成魚になるまでに、雌で6〜8年かかる。上流域で産卵、ふ化した後、下流域で成長し、一部は降海する。かつては道内や東北の40以上の河川に生息した。環境省のレッドリストで絶滅の恐れが2番目に高い「絶滅危惧IB類」に指定されている。日本では保護区域などを除き、法的に捕獲が禁じられていないが、釣ったイトウを放流するのがマナーとなっている。

電子版に写真